

熊本学園大学 機関リポジトリ

「北塞記畧」訳注(1)

著者	宮下 尚子
雑誌名	熊本学園大学文学・言語学論集
巻	21
号	2
ページ	43-60
発行年	2014-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00000581/

「北塞記畧」訳注 (一)

The annotated translation of Buk-Say-Gi-Lyak (I)

訳者 宮下尚子 (MIYASHITA Naoko)

はじめに

「北塞記畧」とは朝鮮李王朝景宗（一六八八—一七二四、在位一七二〇—一七二四）から純祖（一七九〇—一八三四、在位一八〇〇—一八三四）の四代にかけて文臣を担当した洪良浩（号を耳溪と称す、一七二四—一八〇二）の著作の一つである。この書は、小倉進平『朝鮮語學史』（東京：刀江書院、一九二〇）において、咸鏡道方言語彙を断片的に記録したものととして知られている。以下、小倉（一九二〇）よりの引用である。

(1)

又咸鏡道方言に關しては洪良浩著「北塞記畧」中「孔州風土記」（孔州は慶興）の條に、

「面謂之社、民謂之鄉徒、鄉族謂之品官、自南徙者謂之人居、巫覡謂之師、里中公事謂之風俗、私奴謂之土奴。」
「門曰鳥喇、山峰曰嶂、高阜曰德、邊涯曰域、牆壁曰築、淺灘曰膝、猫曰虎樣、貫牛曰輪道里、鳥網曰彈、狹戸曰生契、南曰前、北曰後」とある。以上は往時の中央官吏が半島の南部或は北部に赴任駐在して手録し得た方言的單語の断片に過ぎぬが、それらの多くが今日と雖も其等の地方に、多少づゝ異なつた語形・意義を以て分布せられて居ることは、頗る興味ある事實である（以上、小倉一九二〇、一〇三—一〇四頁より引用）。

このほか、小倉（一九二七）『咸鏡南北道方言』、小倉（一九二九）『平安南北道の方言』、小倉（一九三〇）『咸鏡南道及び黃海道方言』においても「北塞記畧」に触れている。

古く朝鮮人にして咸鏡道の言語に就き記述したものを多く発見することが出来ぬ。「北塞記畧（ママ）」に。面謂之社、民謂之郷徒、郷族謂之品官、自南徙者謂之人居、巫覡謂之師、里中公事謂之風俗、私奴謂之土奴。

門曰鳥喇、山峰曰嶂、高阜曰德、邊涯曰域、牆壁曰築、淺灘曰膝、猫曰虎様、貰牛曰輪道里、鳥網曰彈、狹戸曰生契、南曰前、北曰後

小車名曰跋高、無論榦南木如弓、後有横輓以受物、輕疾勝車、尤利雪上、如風帆行水。

地宜麻織細布、無綿桌不蠶桑、衣袴用狗皮、襪用牛革長沒脛、名曰多路岐、不着鞋屨。

海棠實曰悅口、茨仁曰馬房、橡實曰栗。（小倉一九二七、二四—二五頁）

これらの引用は、語彙のみの断片的なものであり、洪良浩という人物についての記載もしくは「北塞記畧」のテキスト自体については触れられないことなはい。そこで本稿は「北塞記畧」について、そのテキスト全文の校訂翻訳を通して、十八、十九世紀の咸鏡道及び咸鏡道方言、延いては中国朝鮮語（特に旧間島地区で現在も行われている朝鮮語）研究の基礎資料を提供することを試みる。

「北塞記畧」テキストは全て漢文によって書かれている。翻訳とともに全ての漢文に和訓を付すことで、「正文」としての漢文が持つ重みと雰囲気を少しでも正確に伝えることができるように努めた。なお、原テキストは全て正字体（旧字体）で書かれているため、テキストの引用および訳文には旧字体を用いた。解説等の地の文では新字体を用いたが、必要に応じて旧字体を使用した。

「北塞記畧」ならびに耳溪洪良浩の文章についての邦訳の試みは管見の限り本稿以前には聞かない。難字および句点の解釈、誤字誤訳を含め、校訳者の浅学非才に因る疎漏を免れ得ないことは重々承知している。諸賢の御指正を希う所存である。

底本について

朝鮮古書刊行會において出版された『渤海考 北輿要選 北塞記畧 高麗古都徴 高麗圖經』という排印本中に「北塞記畧」が見えるが、序跋ならびに撰者の名無く、排印の元になった版本（あるいは抄本）の所在についての情報を欠く。京都大学東アジア人文情報学研究センターの「全国漢籍データベース（日本所藏中文古籍数据库）」において「北塞記畧」を検索すると、以下の2件の情報を得た。

(イ) 北塞記畧一卷 即耳溪外集卷第十二 朝鮮 洪良浩撰 日本 鈔本

(ロ) 北塞記畧 朝鮮 洪良浩 朝鮮群書大系第十五輯

(ロ) は先に挙げた朝鮮古書刊行會よりの排印本であろう。(イ) は日本で書写された抄本であるらしい(関西大学所藏、未見)。これによつて「北塞記畧」は『耳溪外集』という書の第二二卷に含まれていることがわかる。排印本(ロ)の元となった版本の情報および所在は記されていないが、『耳溪集』『耳溪外集』は癸卯(一八四三年、憲宗九年)に四宜堂より出版された銅活字本が存在する。これは洪良浩の孫である洪敬謨が一八四三(憲宗九)年に出版したものである。

現在のところ、訳者が日本国内で『耳溪外集』第二二卷の所藏を確認できたのは、大阪府立中之島図書館韓本コレクションのみであった。刊本の体裁は『耳溪集』『耳溪外集』を通して同一であり、四周单边、有界、上黒魚尾版心に書名(耳溪外集)、巻数、文書名、葉数を記す。半葉の行数、字数は本文が一行×二〇字、銅活字印本である。表紙に「癸卯新編 耳溪集 四宜堂藏」とあり、一八四三年に発行されたことがわかる。なお、朝鮮古書刊行会の排印本とは僅かな字句の異同があるほか、四宜堂本は第二五、二六葉に「白頭山圖」を挟むが朝鮮古書刊行会の排印本には図は見られない。

四宜堂本の影印として、以下の三種が認められる。

- (ハ) 『原本北塞記畧 南明集諺解』(原本國語國文學叢林三四) 서울…大提閣、一九八七。
- (ニ) 『耳溪洪良浩全書(上下)』서울…民族文化社、一九八二。
- (ヘ) 『耳溪先生文集』(一一六)(韓國歷代文集叢書、韓國文集編纂委員會編) 서울…景仁文化社、一九九四。

本稿を作成するにあたっては、(ハ)の『原本北塞記畧 南明集諺解』ならびに大阪府立図書館の電子データを参照したことを付け加えておく。

「北塞記畧」について

『耳溪外集』卷一二に収められている。「孔州風土記」「北關古蹟記」「交市雜錄」「江外記聞」「白頭山考」「海路考」「嶺路考」の七編の文章から成る。「孔州風土記」の孔州とは高麗時代の呼称であり、李氏朝鮮時代に慶興と改称、一九七七年以後現在では恩德郡とされている。北朝鮮の咸鏡北道東北部に位置し、豆満江に面している。世宗の時代に女真族の侵入に備え設けられたいわゆる「六鎮」(鍾城、穩城、会寧、慶源、慶興、富寧)にほぼ相当する一帯である。六鎮の設置とともに、民戸を増やし確保した領域を安定させるために民戸を増やす目的で徙民政策がとられ、南部から数回の移民が実施された。「北塞記畧」はこのような厳しい状況下の北方前線の地名風物を持つことは周知の通りである。また、「北塞記畧」をはじめとする洪良浩のいくつかの著述には当時の咸鏡道方言を漢字音を用いて表記したものが収録されていることで知られており、朝鮮語の方言研究に役立つであろう

貴重な資料であることは言うまでもない。許多の古籍の中から数度にわたって影印、排印発行されていることがその左証であるともいえよう。

なお、「北關古蹟記」の「北關」や「北塞」とは朝鮮半島の北方の要衝である六鎮や咸鏡道（朝鮮王朝における行政区域である八道のひとつ。道内の主要都市である咸興と鏡城より付けられた名称であり、現在は咸鏡南道と咸鏡北道に分かれている）を指して言うが、咸鏡道だけではなく、豆満江一帯の現在は中国側である琿春、寧古塔、吉林等の事跡についても述べてある。「交市雜錄」とは豆満江沿岸の中国人との交易について述べたものである。「江外記聞」は豆満江以北の寧古塔（現在の黒龍江省寧安県の旧名）、会寧、琿春等の事情について述べる。「白頭山考」は白頭山（中国名は長白山という長白山脈の最高峰）の歴史や地勢について考証したものである。

耳溪洪良浩

撰者洪良浩については、『耳溪集』巻一八「太史氏自序」に詳しい。名門豊山洪氏の出身で、初名は良漢。字は漢師、号は耳溪。丹陽郡守重聖の孫であり、鎮輔の息子である。洪鎮輔は洪良浩が一〇歳のときに夭折した。そのため洪良浩は父の死後伯父の家に養われ勉学に励み、成均館に入り、二四歳で生員試庭試文科に合格し二九歳で翰林に選補されている。持平（司憲部に属する。正五品）、修撰（弘文館に属する。正六品）、校理（弘文館に属する。正五品）を務めた後、一七七四年登俊試に合格した。英祖の知遇を受け、わずか数ヶ月で六品に昇進し侍講院司書（世子に対する教育を担当した部署。世子侍講院を正式名称とする。司書は正六品）となった。一七五四年に湖南（全羅道の別称）掌試官として申景濬に拔擢される。その後自請して江東県（平壤直轄市域の東部郊外に位置し、平安南道、黄海北道と接する。朝鮮王朝時代は平安道に属した）に務めた。

「太史氏自序」によると、耳溪は中央官僚として凡俗なまま保身に走ることを嫌い、地方へ出ることを自ら望

んだようである。

英宗大王特器之、多所顧問。每稱其博學。同列頗忌之。良浩益自斂晦。數月特陞六品階、直除侍講院司書掌試。湖南得人最盛、及禮部會圍魁元、皆出湖南。人至今稱之、選入玉堂。良浩不樂在朝、求外、只江東縣。【和訓】英宗大王は特に之を器とし、多く顧問する所となる。毎に其の學の博きを稱むる。同列頗る之を忌（にく）む。良浩益（ますます）自ら晦（くら）きを斂（のぞ）む。數月にして特に六品階に陞る。直に侍講院司書を除し掌試す。湖南は人を得ることが最も盛んにして、及びて禮部會圍魁元、皆湖南を出る。人今に至るも之を稱し、玉堂に選入す。良浩朝に在りて樂しまず、外を求い、江東縣を知る。

洪良浩は江東県において善政を広げたが、一年ぶりに召還された時には浮沈の生活を余儀なくされた。正祖の冊儲の功勞で通政に上がり、承政院に務めたが、慶州府尹（慶州は現在の慶尚北道慶州。高麗時代には副都（府）と位置づけられた。府尹は府の長である）、義州（現在の平安北道義州郡。鴨綠江河口にあり高麗時代以来軍事や貿易の拠点として栄えた）府尹、洪州牧使（牧とは行政単位。牧使は牧の長）を経て、彼の守令（地方官）としての名声は高まる一方であった。洪州合徳の大堤を築き住民によって紀功碑が建てられ、慶州にいる間に文武王陵碑、太宗武烈王碑、眞興王巡狩碑に関心を持つに至った。

一七七〇年に黄海道觀察使（従二品、成均館大司成（成均館における実質的な長。正三品堂上官）、經筵官（国王の學問修養のために宮中で學識の高い臣下を集め行つた經史書勉強会のメンバー）、侍講筵を務め、一七七七年正祖の側近であった洪國榮の勢道政治に伴う横暴が激しくなると、慶興府使に左遷される。このとき三年間閉門讀書して「六書經緯」「大象解」「萬物原始」「朔方風土記」などを出した。

洪國榮の失脚に伴い一七八一年、中央に召還され、英祖実録編纂堂上官（王と直接議論を交わすことのできる地位。正三品以上）となった。漢城府右尹、大司諫を歴任し、翌一七八二年乾隆帝の七〇歳祝賀特使の副使（冬

至使」として清に派遣された。弘文館提學吏曹判書を経て、一七九一年に平安道觀察使として多くの成果を残した。彼は詩文にも長じていたので、清国においても評判が高かった。帰国後時務六条を疏陳した。これは、洪良浩が清国へ赴いて朝鮮の現状を振り返り上疏したもので、(一) 制軍…役車の功用と治道を力説、(二) 鑒法…煉瓦を城壁、家屋建築に用いる、(三) 牧驢羊(驢羊を牧す)…牧畜による民富強兵、(四) 禁銅器(銅器を禁ず)…銅器の代わりに磁器を使わせ、銅は貨幣鑄造に用いること、(五) 罷氈帽(氈毛を罷る)…中國製品の輸入を禁じること、(六) 肄華語(華語を肄ふ)…訳院教育と朝士に漢学を学ばせ漢学の調査を徹底的にさせることなど、清国での見聞及び体験を根拠に説明した。

一七九四年に再度乾隆帝の年終宴を祝う特使(冬至使。朝鮮王朝時代毎年冬至の時期に中国に派遣される使者)として清国に行き、清国の翰林修撰戴衢亨と礼部尚書紀勻と交遊して詩文について大変な賞賛を受けた。特に紀勻は洪良浩と同甲(同輩)ということで耳溪詩集序と文集序を書いて与えることまでした。

朝鮮に帰国後は吏曹判書(吏曹とは、朝鮮李王朝において行政実務を担当した六曹(吏曹、戸曹、禮曹、兵曹、刑曹、工曹)のひとつ。文官実務を担当した。判書は各曹の長官職であり正二品に相当する)となり、一七九九年に両館大提學を兼任。一八〇一年には、判中枢府事も兼ねた(従一品。中枢府とは武官の最高機関にして名誉職。その名目上の責任者。兼任を基本とする)。

学問と文章に優れ、「英祖實錄」「國朝寶鑑」「藝塲錄」「同文彙考」などの編纂を主管し、中国で蒐集した考証學を普及させた。地方官として出た際には治山治水に尽力し、通信使一行に頼んで取り寄せた日本の桜をソウル牛耳洞に植樹したりもした。『耳溪集』をはじめ、「六書經緯」「群書發排」「格物解」「七情辨」「海東名將伝」「高麗大事記」「興王肇乘」「朔方拾遺」「北塞記畧」などの多くの著述を残している。

資料

「太史氏自序」「耳溪集 第一八」

参考文献

- 小倉進平 (一九二四) 『新羅語と慶尚北道方言』 大阪・大阪東洋學會。
 小倉進平 (一九二七) 『咸鏡南北道の方言』 京城・朝鮮語研究會。
 小倉進平 (一九二九) 『平安南北道の方言』 京城・京城帝國大學。
 小倉進平 (一九三〇) 『咸鏡南道及び黃海道方言』 京城・京城帝國大學。
 金井孝利 (二〇一三) 『韓国時代劇・歴史用語事典』 東京・学研パブリッシング。
 韓国教員大学歴史教科書、吉田光男監訳 (二〇〇六) 『韓国歴史地図』 東京・平凡社。
 松田甲 (一九二七) 『日鮮史話』 (第三編) 京城・朝鮮総督府。

耳溪洪良浩撰『北塞記畧』譯注 (一)

凡例

段落ごとに【正文】により原文を挙げ、必要な場合は【校】にて校点を示す。【和訓】を付したのち、必要な場合は【釈語】にて語釈を行う。【現代語】を示し、更に必要な場合は【解説】を付した。【正文】【和訓】及び正文の引用においては原文のままの正字体を使用。必要な場合は「」により仮名あるいはハングルによる音を示した。

北塞記畧

孔州風土記

(一)

【正文】

摩天嶺。盤據端川吉州之間。南北道分焉。南謂之南關。北謂之北關。

【和訓】

摩天嶺。端川と吉州の間に盤據す。南北道を焉に分かつ。南は之れを南關と謂ひ、北は之れを北關と謂ふ。

【釈語】

孔州…咸鏡北道、今の慶興より少しく南方の古邑。

摩天嶺…摩天嶺山脈。朝鮮民主主義人民共和国、白頭山の南東から咸鏡北道、咸鏡南道、両江道の境界をほぼ南北に走って東海岸に至る山脈。朝鮮半島で最も高峻な山々が連なり、鴨緑江と豆満江の各支流の分水嶺をなす。

端川…朝鮮民主主義人民共和国咸鏡南道の都市。

吉州…朝鮮民主主義人民共和国、咸鏡北道南部の郡。摩天嶺山脈中から発して日本海へ至る南大川沿いの峡谷平野を除くと、大部分険峻な山地に覆われている。高麗時代睿宗二〇七九—一一二二、第一六代高麗王、在位二一〇五—一一二二の時に尹瓘（いんかん）が女真族を追い出して、高麗王國の東北部沿岸一帯に築いた九城の一。吉州のほか、咸州、福州、雄州、英州、通泰州、真陽鎮、崇寧鎮、公嶮鎮から成る。中心地の吉州邑は、咸鏡線から恵山、茂山方面へ至る鉄道の分岐点としても発達した。

【現代語】

摩天嶺は端川と吉州の間に盤據し、咸鏡南道と咸鏡北道の分岐点である。摩天嶺の南側を南關と言い、北側を北關と言う。

(二)

【正文】

北關列郡有十。曰吉州、明川、鏡城、富寧、會寧、鍾城、茂山、穩城、慶源、慶興也。

【和訓】

北關郡を列「つらぬ」ること十有り。曰く吉州、明川、鏡城、富寧、會寧、鍾城、茂山、穩城、慶源、慶興なり。

【現代語】

北關には十の郡が有る。吉州、明川、鏡城、富寧、會寧、鍾城、茂山、穩城、慶源、慶興である。

甲州…咸鏡南道今の甲山。

(三)

【正文】

鏡城以北謂之六鎮。六邑分列於豆滿江邊。曰會寧、鍾城、茂山、穩城、慶源、慶興也。

【和訓】

鏡城以北を之れ六鎮と謂ふ。六邑は分かちて豆滿江邊に列す。曰く會寧、鍾城、茂山、穩城、慶源、慶興なり。

【現代語】

鏡城以北を六鎮と言う。六邑はそれぞれ豆滿江辺にならぶ。會寧、鍾城、穩城、慶源、慶興である。

【解説】

鏡城…咸鏡南道今も同名。

六鎮…世宗の時代に女真族の侵入に備えて設けられた六箇の軍事拠点。

（四）

【正文】

慶興古孔州之地。昔有人掘得銅印。而文曰、匡州防禦使印。故一號匡州云。初設慶源府於孔州。世宗十年、移治於會叱家之地、以距孔州古地、隔遠難守、復修孔州古城、析置萬戶、兼孔州等處僉節制使、十七年割傍近民戸三百屬之、置孔城縣。以僉使兼縣事。十九年以 穆祖肇基之地、陞爲郡、改稱慶興、二十五年更廣其城。陞爲都護府。

【和訓】

慶興、古は孔州の地。昔人の掘りて銅印を得る有り。而て文に匡州防禦使印と曰く。故に一に匡州と號すと云ふ。初め慶源府を孔州に設く。世宗十年、會叱家の地に移して治む、以て孔州古地と距つ。隔遠にして守り難ければなり。復た孔州古城に修しめる。萬戸を析置し、孔州等の處に僉節制使を兼ねる。十七年傍近の民戸三百を割き之に屬し、孔城縣を置き、僉使を以て縣事を兼ねさしむ。十九年穆祖肇基の地たるを以て、陞せて郡と爲す。慶興と改稱し、二十五年更に其の城を廣む。陞せて都護府と爲す。

【釈語】

穆祖…李安社。李氏朝鮮の初代君主である太祖李成桂の高祖父。元から遼陽等処行中書省の開元路の幹東（알도、慶興の豆満江対岸で現在ロシア領）のダルガチ（モンゴル帝国の官職名、ジャルグチ・ビチクチと並ぶ重要官職であり各々の領地の民政統治官、行政長官としての業務を行う）に任命された。都護符…高麗および朝鮮李王朝時代に設置された辺境防備のための行政機関。

郡…古代から設置されていた地方行政単位であり、州や道の下位に属し県より大きな単位。県…古代から設置されていた地方行政単位であり、州や道の下位に属する。中央からは守令が派遣される中で

は最小の単位。
城…城塞都市。

【現代語訳】

慶興は以前は孔州と言った。昔銅印を掘り当てた人がいて、その銅印には匡州防禦使印と書かれていた。したがって、このあたりを一名では匡州と言う。最初は慶源府という役所を孔州に設けた。世宗十年（一四二八）、會叱家の地に府を移した。このようにして府が孔州の古地と隔てられてしまった。隔たり遠いところにあるため防御が難しく、もう一度孔州古城に府を移した。万戸を設置し、孔州等との僉節制使を兼ねさせた。世宗十七年（一四三五）近隣の民家三百を割いて之に属させ、孔城県を置いた。僉使が県事を兼ねさせた。世宗十九年（一四三七）穆祖開業の地ということで郡に昇格した。慶興と改称し、世宗二十五年（一四四三）更に城を廣げ都護府に昇格させた。

【解説】

慶興は古名を孔州もしくは匡州と言った。長らく女真族の地であったが、高麗の尹瓘が女真を追い出し、城を築き公險鎮内防禦所を作った。穆祖（太祖李成桂の高祖父）が王業の基盤を開始した地でもあるため、慶興と改称された経緯を謂う。

(五)

【正文】

置四鎮於境内、在北二十六里曰撫夷堡。在南三十五里曰造山堡。在西三十七里曰阿吾地堡。在南六十里曰西水羅堡、并置萬戸。

【和訓】

四鎮を境内に置く。在北二十六里を撫夷堡と曰う。在南三十五里を造山堡と曰う。在西三十七里を阿吾地堡と曰う。在南六十里を西水羅堡と曰う。并せて萬戸を置く。

【現代語訳】

四鎮を境内に置く、在北二十六里（約一〇・一九二キロ。一里は三九二メートルで日本の一里の約一〇分の一に相当する）を撫夷堡と言う。在南三十五里（二三・七二〇キロ）を造山堡と言う。在西三十七里（二四・五〇四キロ）を阿吾地堡と言う。在南六十里（二三・五二〇キロ）を西水羅堡（慶興）と言う、あわせて萬戸を置く。

【解説】

四鎮および阿吾地堡、撫夷堡については、例えば成宗實錄二十四年（一四九三）に次の記載がある。「阿吾地距撫夷堡不遠撫夷之民入保於阿吾地民多無家可容、故設土宇、以居之。請加築撫夷城。子低微處、仍留防以除其弊」（阿吾地は撫夷堡から遠からずして、撫夷の民は阿吾地に入保するも、民多くは家の容るべきもの無く、故に土宇を設けて以て之に居らしむ。撫夷城を加築せんことを請う。子の低微に處るものは、仍ち留防し以て其の弊を除かんとす）

（六）

【正文】

慶興緣山爲城、城臨豆江。南連滄海。盖我國東北地盡頭、而府城居中。四鎮環琪。如碁布星列。

【和訓】

慶興に縁る山を城と爲す。城は豆江を臨む。南は滄海に連なる。盖し我が國の東北の地の盡頭、而るに府城の居中にして、四鎮環珙すること碁を星列に布するの如し。

【現代語訳】

慶興に連なる山を城（城壁）とする。城は豆滿江を臨む。南は滄海に連なる。おそらく朝鮮の東北の地の果てるところであり、府城（府の首都）の中心であろう。四鎮が並ぶ様は碁石を星点（盤上の黒点）に布すようである。

（七）

【正文】

孔州極北不毛之地也。三春無花。八月見雪。衣無纈絮、食惟黍粟、而地踔遠人民希。瘠土無積聚、大與中國之上郡北地俗相類。久爲女眞野人之所據。多有被鄙之風。其利樺皮麻布貂豹之皮。

【和訓】

孔州は極北にして不毛の地なり。三春花無し。八月に雪を見る。衣は纈絮無く、食は惟だ黍粟のみ。而るに地は踔遠にして人民希れなり。瘠土は積聚（しゃくじゆ）無し、大いに中國の上郡北地と俗に相類す。久しく女眞野人の據する所と爲す。多く鄙を被むるの風有り。其れ樺皮麻布貂豹の皮を利す。

【釈語】

三春…舊曆の春の三ヶ月。

八月…舊曆なので秋の初め

續絮…わた。續は新しい綿、絮は古い綿。

蹕遠…はるかにへだたつていて遠い。『史記』貨殖篇に「地蹕遠」という用例がある。

女真野人…中国明代における女真三大部族の一つ。明代女真は建州、海西、「野人」の三部に分かれており中でも「野人」女真が最も北方に位置し、勇猛であつたとされる。

上郡…郡名。陝西省北部と緩遠省顎爾多斯左翼の地。秦より設置さる。

北地…地名。今の寧夏省及び甘肅省東部を含む地。秦より設置さる。

【現代語訳】

孔州は北の果てにある不毛の地である。春のうちは花が咲くことはない。秋の初めには雪を見る。着るものとして綿は新しいのも古いのも無く、食べるものは黍や粟のみである。はるかに遠い場所にあるので人はほとんどいない。瘠土は積聚無く、中国の上郡北地とよく似ているかもしれない。長いこと女真野人によって占領されており、たいへん賤しまれているような雰囲気もある。白樺の皮、麻布、貂豹の皮という天然資源に恵まれている。

【解説】

小倉進平『咸鏡南北道方言』（朝鮮語学会、一九二七）の記述を以下に引用する。

高麗起こつて半島に臨むや、北境は女真族の侵寇に悩まれ、睿宗の時には彼の尹瓘の北征となつた。随つて當時の咸鏡道は高麗女直の爭奪地と化し、咸鏡附近以北の地は結局之を女真に割譲せねばならぬことになつた。蒙古興るに及び、金を亡ぼし、次いで高麗の北邊を侵し、咸鏡に哈蘭府を置いた。其の後李成桂の高麗

を亡ぼし、北境に孔鏡吉等七州を置いてより、此の地方は永く朝鮮の領有に歸するに至つたが、其の後と雖も尚ほ女真人の半島内に侵入するもの頗る多く、争鬭絶間無く、世宗のときには國境に所謂六鎮を設けしめたことさへある。然るに女眞の一族たる奴兒哈赤（清太祖）が崛起し、間島地方を平定するに及び盛んに其の地方に於いて壮丁を徴したので、女真人の難を鮮内に避くる者多く、國境地方は復々彼らの侵寇を蒙るに至つた。然るに其の後清太祖は支那中原に進出したので、國境方面はしばらく事無きを得た。（四頁）

〔二〇一四年九月〕

